

「食と農」の博物館

展示案内 No.65

展示期間 ■ 2013.3.30～2013.7.15

東京農業大学「食と農」の博物館

〒158-0098 東京都世田谷区上用賀2-4-28

TEL.03-5477-4033

FAX.03-3439-6528

(URL) <http://www.nodai.ac.jp/syokutonou/>

開館時間 午前10時～午後5時 (4月～11月)

午前10時～午後4時30分 (12月～3月)

休館日 月曜日(月曜が祝日の場合は火曜)・毎月最終火曜日

大学が定めた日(臨時休業がありますのでご注意ください)

『日本の森林復旧』展

—日本の山はハゲ山だった—



大台ヶ原

陸奥白河藩第3代藩主、松平定信は、「山に木がなくなり、川の水が枯れるのは国が滅ぶ兆し」として、森林を大切にすることを説いています。また、木曾国有林といえば「ヒノキの美林」で有名ですが、その美林成立を物語るものに「木一本首ひとつ」があります。このような森を大切にする政は全国各地に存在しています。昔から森を大切にすることは、国にとって重要な約束ごとでした。

戦中・戦後(70年くらい前)より木材は、経済発展のためのエネルギー源や資材として大量に使われ、山紫水明の豊かな森は、乱伐によって禿げ山となり、全国各地で山津波や洪水が発生し、尊い命や糧の田畑が失われました。当時の人たちは、脆弱になった国土を再生するために、先人達の教訓に学び、「山に木を植えることは、川を治めること」(治山治水事業)として総参加による植林を進めてきました。その結果、国土の約50%まで減ってしまった森を約7

割までに再生してきています。世界でも有数の森林国として生まれ変わりました。ところが、今、わが国の森は、手入れ不足によって荒廃し、再び国土が危ぶまれています。かつては木を伐りすぎて森を荒らしましたが、今は木を伐らないことによって、森を荒らしています。

森は木材だけでなく、安心、安全な暮らしのために、山津波を防ぎ、清水を潤し、豊かな大地と河川・大海を肥やします。最近では二酸化炭素を吸収・蓄積して地球温暖化防止にも大きく役立っています。

ここに開催する『『日本の森林復旧展—日本の山はハゲ山だった』写真展』は、国土緑化推進機構と毎日新聞の協賛により、森を深く愛し、守ってきた先人達の偉業から学び、森と私たちの暮らしや生業、そして森が育む人の心と文化などを再認識するきっかけとなることを期待して開催しました。

(森林総合科学科 学科長 佐藤明)

1. 日本の森林の現状と課題

日本の森林面積は、国土面積の67%に当たる2,512万haで、世界でも有数の森林国です。しかし、国民一人当たりになると0.2haと最も少ない貧林国となります。また、個人や会社などが所有する私有林が約6割、国が所有する国有林が約3割、自治体が所有する公有林が約1割となっているなど、多様な所有形態となっています。

日本の森林の特徴は、一つは、世界の森林面積が、アジアやアフリカ、南米などの熱帯林を中心に、この5年間に約730万haも減少していますが、日本の森林面積はこの40年間にほぼ横ばい状況にあり減少していません。二つは、森林の蓄積（木材の蓄積量）が1966年の19億m³から約2倍に当たる44億m³へと増加していることです。1995年頃を境に、戦後に植えられた、スギ・ヒノキを中心とする人工林の蓄積が天然林の蓄積を上回り、植えた木が豊かに育っているようにみえますが、一本一本は線香のように細く、森全体では、肥満状態にあるのです。三つは、それら人工林を林齢別（植林してからの年齢別）にみると、手入れをしなければならない森林が8割を占めており、しかも、この人工林の多くは、植林後70年を過ぎているものが多く、伐採（収穫）が可能な森林であるのに伐採されない現状にあります。四つは、自然林の中には、薪炭生産のあと放置された森林が多く、既に50年を経過して、木が大径木になっていることです。五つは、これらの森林は統計的には成熟し、豊かにみえますが、その大半は間伐や除伐など適正な管理が大きく遅れており、質的

に脆弱な森林となっているものが少なくありません。みどり豊かであるように見える日本の森林は、実際は、人工林は、管理不足で、太陽の陽が差し込まない密閉した線香林（暗い森）と化し、広葉樹林は大径木化とともに、藪化が進み、特に、里山は野生動物の温床となり、全国的に鳥獣被害増加する傾向にあります。

かつて私たちは森林から木材をはじめ清らかな水や国土保全など多様な恩恵を得てきました。その森林利用が大きく転換するのは、戦中戦後の木材需要の拡大と1950年代の薪炭から石油への燃料革命であり、エネルギー利用から木材生産利用へと大きく転換し、スギ・ヒノキを一斉に植林することとなりました。特に、戦後もなくのわが国は、戦時物資のためと戦後による復興のために膨大に木材が使われ、各地の森林が荒廃し、山津波や山崩れなど大きな山地災害が頻発していました。当時の記録によると森林面積は国土の50%まで縮小し、流域によっては40%代に減少しています。こうした中で、1950年4月に山梨県で天皇皇后両陛下のご臨席の下、第1回全国植樹祭が開催され、その後毎年全国各地で開催されるようになりました。世界的な経済恐慌期にあった昭和初期に、森林資源の充実を命題として、大日本山林会を中心に、昭和8年に愛林日が設定され、その翌年の4月に現在の全国植樹祭の前身となる全国で初めての全国植樹祭が筑波山麓で行われました。

1960年代になると木材需要量の急増から丸太の輸入自由化がスタートしました。その結果、安い外材に押され、あるいは木材に変わる新材材の増加によって住宅の木造率が低下し、国産材価格が長期にわたって暴落することとなり、



日本林業は大きく縮小することとなりました。

国産材の価格は他品目の物価が上昇する中で、30年前の1/10まで下落するなど林業を取りまく状況は厳しく、後継者不足や高齢化が進み、収穫できるようになった森林から木材が出てこないなど、管理不足の森林が増加しています。また、最近では、不在村者所有林（そこに住んでいない人が所有している森林）は私有林の24%に増加しており、森林の無縁林化が進む傾向にあります。

このようにわが国は、かつては木材を伐りすぎることによって森林を荒廃させていましたが、現在は、木を使わないことで森林を荒廃させています。このままの状態では、全国各地の森林は脆弱な林相となり、私たちの生活と極めて大きく関わりのある森林の多面的な機能が失われることとなり、取り返しの付かない事態となるでしょう。



2. みどりをとり戻した人々

わが国は、温暖多雨で、急峻な地形にあって、古くから災害列島であり、幾つかの大きな災害を経験してきました。そのような中で、「川を治めることは、山を治めること」という先人の教えに従い、森づくりに生涯を費やした人たちが全国各地に存在しています。その中の一人である金原明善は、明治維新のころ、暴れ狂う天竜川の治山事業に全財産を費やし、天竜川の疏水事業を実現するなど、現在の天竜林業の基礎を築いています。その他にも、各地域には、尊い人命を奪い、生業の田畑や暮らしの家屋をいとも簡単に奪う暴れ川に対して、山に木を植え、懸命に立ち向かった人たちがいます。こうした人たちは、次世代の暮らしや生業を考え、如何に安全で、安心できる村や町をつくるか、如何に残すか、が頭にあったといえます。

現在、わが国の森林面積は、国土総面積の67%を占めていますが、60年くらい前までは50%代でした。これを先人達は、私たちのために植林を続け、約7割まで回復してくれています。その森林が、前述のように管理不足によって崩壊しつつあるのです。いま、私たちは次世代のために何をすべきなのでしょう。2011年3月11日の東日本大震災においても、「この碑より下に家を造るべからず」とか、波分神社など、先人達からの多くのメッセージが残されています。正に、森を大切に守り、緑豊かな国土と安全な国土を次世代に残す責任があるといえます。



襟裳砂漠と呼ばれていた (1950年代)

3. 国土緑化と治山治水

治山事業とは、健全な森林（保安林）を守り育てることによって、山崩れなどの山地災害から住民の生命・財産を守ることや森林が持つ水源のかん養機能を高めたり、さらにはみどり豊かな生活環境の保全や形成等をめざしている事業です。主な事業内容は、山崩れ、土石流、地滑り、雪崩などの山地災害によって住宅や学校、道路などの公共施設が被害を受ける恐れのあるところや、重要な水源流域および市街地周辺の森林において治山施設（堰堤や山腹工）を造り



京都市山科区 琵琶湖疏水第3トンネル付近か(明治時代)

安全な森林を造成することです。また、山崩れなどの災害が発生しないようにすみやかに復旧することです。したがって、自らが行わなくても、災害時には行政サービスが行ってくれるもののように考えがちですが、災害時は自己避難、自己予防が最も大切なキーワードです。また、健全な森林造成は100年の計とも言われていますので、いざというときに備えて、整備を怠らないことが大切です。国土緑化は国民全員が参加する活動であることが大切です。

4. これからのみどりと日本人

私たちの先祖は、森林を愛し、森林を守り、森林と共に生きてきました。それは正に森林を共通財産として位置づけ、地域の共同社会の中で一定のルールを守りながら皆で守ってきました。私たちも、国土の67%の森林を如何に健全で、「みどり豊かな国土」として次の世代に受け渡すのかが大きな課題であり、責任といえます。そのためには、民間、行政、NPO、学校などあらゆるセクターが参加した国民協働による森づくりを進めることが重要になっています。

展示の主催・企画・制作

【主催】東京農業大学 地域環境科学部森林総合科学科

【企画・制作・展示】『日本の森林復旧』展企画展示実行委員会

○委員長 宮林茂幸 ○委員 佐藤 明、大林宏也、福永健司、橋 隆一

【展示案内文責】宮林茂幸

【後援】国土緑化推進機構

【協賛】毎日新聞社

【写真・資料提供】国土緑化推進機構・毎日新聞社

その他の展示・催事のお知らせ

■常設展

「醸造のふしぎ—微生物が醸す世界—」展 【期間】平成24年3月30日(金)～平成26年3月23日(日)

【主催】東京農業大学 応用生物科学部 醸造科学科、同短期大学部醸造学科

鶏(ニワトリ)剥製標本コレクション

展示中

色々な酒器コレクション

展示中

農大卒業生の蔵元紹介(酒瓶のオブジェ)

展示中

■企画展

「緑化作品にみる「農大造園家」90年の軌跡、そして明日へ」

—明治神宮の森から首都高速大橋ジャンクション「目黒天空庭園」まで—

【会期】2013.3.30(土)～2013.9.16(月/敬老の日)

【主催】東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科

「日本の森林復旧」展 —日本の山はハゲ山だった—

【会期】2013.3.30(土)～2013.7.15(月/海の日)

【主催】東京農業大学 地域環境科学部 森林総合科学科